

日本有数の鉱山遺跡「石見銀山」



大田市内から邑智郡川本町へ向かう道を一五分ほど車で走ると、大田市大森町につきます。ここに銀山遺跡として日本有数の規模を誇る石見銀山（大森銀山）があります。

石見銀山の銀鉱石は、仙の山（銀峯山）から産出されました。この山のまわりには、銀を掘った露頭掘りや坑道掘りの跡・精錬の跡など、たくさん遺跡があります。また、山のふもとの銀山川沿いには、銀の管理・輸送などにかかわった人びとの町並みが当時の姿を色濃く残しています。鉱業から政治・信仰まで一連の遺跡が総合的に残されている石見銀山は、非常に貴重なものと言えます。

一六世紀前半から開発された石見銀山は、戦国時代には大内・尼子・毛利などの戦国大名によって、山吹城や銀山を巡る争奪戦が行われました。江戸時代になると幕府直轄領（天領）となり、初代奉行の大久保長安によって坑道掘りなどの技術革新がなされました。石見銀山は、日本経済に大きな影響を与え、江戸時代初期には徳川政権の経済を支えたと言えるでしょう。その後、産出量は減ったものの、大正二年（一九一三）の閉山まで採掘が行われました。

近年の調査により、全国的にも保存状態の良い鉱山遺跡として重要性が再認識され、その保護と活用への取り組みが注目をされています。

大森から始まる銀の旅

世界の貨幣経済を変えた石見の銀

銀の流通は、時代によって大きく変わっていききました。一六世紀には、博多から中国などを経由して遠くはヨーロッパまで行き、豪華な調度品などに姿を変えていきました。また、大森の銀は「そうま銀」として世界に流通しました。「そうま銀」というのは大森銀山の地名の一つである「佐摩」からきていると言われています。

日本からの銀の輸出量が大量にふえたため、世界の貨幣経済にも大きな影響を与えました。最盛期には、世界の銀の流通量の三分の一が日本の銀であり、そのうちかなりが大森銀山の銀であったと言われています。

江戸時代になると、銀は大坂の「銀座」に集められました。そこで貨幣となり、江戸幕府の経済を支えました。

銀の運ばれた道



石見にある大森から、消費地である博多や大坂まで銀や銀鉱石を運びだすのは大変な仕事です。大森で採れた銀を運ぶ道も、時代によって変わっていききました。

大森から銀が発見された当初は、瀬戸内海の馬路の港へ運ばれていましたが、産出量の増加に伴い、もっと大きな港である温泉津の港に運ばれるようになりました。

江戸時代になると、赤名峠を越えて広島の尾道に連絡する



陸路を利用して大坂に運ばれました。この道の一部は、現在では中国自然歩道として整備されています。このルートを使った輸送には近隣の農民が狩り出されましたが、当時の人びとにとっては大きな負担だったようです。